

レンブラント『バテシバ』における「醜」と「悪」

伊野連 (早稲田大学)

レンブラント『バテシバ』(1654)は、まさに文字どおり「ユニーク」な作品である。それはあの有名な主題を用いた古今の数多の「バテシバ」の、いずれにも似ていない。さらにレンブラント自身によるバテシバの前作(1643)とも、まったく異なる。あらゆるバテシバが女性の官能美を主題としているのに対して、レンブラントはこの『バテシバ』でそれまでの方針を決然と捨て去り、彼女の倫理的葛藤と権力への思慕を描き出した。画家は彼女をダビデ王の「共犯者」としたのであろうか。

ローゼンクランツ『醜の美学』(1853)以来、非倫理的な悪の醜さは、美学的・倫理的に重要な問題であり続けている。まさにこの『バテシバ』は、重大な倫理的問題、すなわち、非道徳性の醜さと悪の美しさの是非を問うている。

バテシバは古来、旧約聖書最大の英雄であるダビデ王の妻にして、栄耀栄華を極めたソロモン王の母という、女としても母としての幸福の頂点に登りつめた人物とみなされてきた。一方で、ダビデの罪——密通と謀殺——は、倫理的に大問題であり、彼女の負の部分はそれと切り離せない。本発表はその解釈において、彼女をダビデの共犯者とみなす独自の見解を有する。

20世紀のレンブラント研究において主導的な業績に、ジンメルによる個々の作品の実証を超えた画家の「生」そのものの追究、ガントナーによる「プレフィグラチオン」概念からの評価(問題意識を共有するフライによる『バテシバ』そのものを主題とした心的葛藤の読み取り)、クラークによる『バテシバ』の真価を遺憾なく見出した、誰よりも豊かなこの名作の解釈等がある。

そして近年ではヴェステルマンが本作を「不本意ながら道德劇に巻き込まれた女」、「道徳的判断力の持ち主とはみなされてこなかった女を描いたものとしては例外的に思索的な絵である」とし、次のような本質を衝いた解釈をおこなっている。すなわち、鑑賞者を瞑想へと誘うこと、「これはレンブラント晩年の物語画の多くに共通する特徴でもある。難しい板挟みの状況のなかで自分自身の倫理に向き合う『アリストテレス』や『バテシバ』はその典型で、どちらも主題の内包する物語を模範的に描きあらわしている」。

一方、ダビデ王の罪と償いについての旧約聖書のテキスト精査も参考となる。現代日本を代表する旧約学者である関根は、ヘブライ語原典すべての綿密な調査と、詩篇をめぐるグンケル以来の定説を覆す画期的なグールダー説(詩篇51は表題どおり、悔悛したダビデの作による)からの援用によって、説得力に富む解明をおこなっている。ダビデの罪と悔い、そして神の赦しとは、そのままバテシバにも反映している。

本発表はこうした先学の成果に負いつつ、それらを総合することによって、モデルをつとめた最愛の女性である内縁の妻ヘンドリッキェへと画家が託した想いをこの傑作に認めるといふ、従来広く認められてきた解釈を、あらためて共有することとなる。